The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ルーマンにおけるコミュニケーションと行為 : 社会的システムの二つの要素概念と基礎的自己言及
Author(s)	遠藤, 竜馬
Citation	年報人間科学. 1992, 13, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11676
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ルーマンにおけるコミュニケーションと行為

——社会的システムの二つの要素概念と基礎的自己言及——

遠藤　竜馬

はじめに

ここでは、ルーマンによる問題提起、「社会的システムの要素は何か」という問いを端緒として考察を開始しよう。(1)

《要素》(Element／原基) とは、「システムを成り立たせている最小単位 (Letzteinheit)」を意味するシステム理論的概念である。その背後には、「ひとつのマクロな統一体を成り立たせている、それ以上は分解不可能なミクロな最小単位が存在する」という暗黙の仮定があると思われるが、それはルーマンの社会的システム理論においても有効である。つまり冒頭の問いは、「社会的システムが、それから成り立っているような最小単位への問い」(S.240) をいいかえたものに他ならない。

ルーマンは、この問いをさらに次のように限定する。すなわち、社会的システムの「最小要素はコミュニケーションか行為か (Kommunikation oder Handlung als Letztelement)」(S.192) と問うのである。そしてこれに対してルーマンは、一見奇妙にも思われる答え方を行っている。「社会的システムは何から成り立っているのかという問いに対し、我々は二重の解答 (Doppelantwort) を与える」(S.240) と彼はいう。つまり彼は、社会的システムはコミュニケーションから成り立つと同時に、行為からも成り立っていると述べているのである。

この主張は入念な検討を要するといってよい。まず何より不審な印象を与えるのは、「二重の解答」という表現であろう。もちろんそこには、論理的な混乱を回避し、コミュニケーション概念と行為概念とを不可分なものとして統合することを必然とするような、独

自のロジックと理論的戦略が存在するはずである。

また我々は、要素概念そのものをめぐる問題についても考察を行う必要があるだろう。その第一の観点は、諸要素の単なる集合体と《システム》との間の距離に関連している。常識的に考えても、システムという統一体が、多数の要素の単なる「集合体」以上の何ものかであることは自明である。「コミュニケーション（や行為）がひとつのシステムを成す」という表現には、それらの要素の間に、何らかの「つながり」や「有機性」が存在するという示唆が含まれている。したがって問題は、そうした直観的にも自明なつながりを社会的システムを成り立たせている諸要素がいかにして獲得しているのかということにある。あるいは、こうした事態の理論的描写はいかなるかたちでもって実現されるのだろうか。

第二に、要素概念が「それ以上分解不可能な」（S.225）単位として定義されていることについても、一定の注意が必要であろう。というのも、コミュニケーションにせよ行為にせよ、現実的にはきわめて複雑な現象であるということを、我々はすでに知っているからだ。コミュニケーションや行為は、少なくともそれらに関与する「人間」を必要とするし、またそれらが他にも様々な「コンポーネンツ」をもっていることは明らかであろう。そうした事実と、要素の単位性という要求とはいかに両立されるのか。

以上の問題を考察するにあたって、本稿ではルーマンの示す《基礎的自己言及》（basale Selbstreferenz）という概念に注目する。彼によれば、これは自己言及の三つの異なる形式――他の二つの形式については必要に応じてふれる予定である――のひとつである（S.600）。しかし、本稿のテーマとの関連で重要なのは、ルーマン理論における要素概念の特性を最も端的に体現しているのが、この形式の自己言及であると思われるという点である。

一九七〇年代後半から八〇年代にかけてのルーマン理論の「転換」が、自己言及概念の導入を核心としていることは、なるほど誰もが認めるところであろう。しかし、社会的システムが自己言及的であるということの含意が広範に理解されているとはいいがたいし、それどころか、自己言及にもいくつかの異なる形式があるということさえ十分には知られてはいないというのが現状である。ともすれば実質を欠いたキーワードのみが独り歩きしがちな状況のなかで、本稿のアプローチが若干なりとも成果を上げていれば幸いである。

一、要素／関係性と基礎的自己言及

ここでは、コミュニケーションや行為という特殊化された要素概念個別の問題をひとまず保留し、ルーマンが要素概念をめぐって展開している、より抽象的な水準の議論を概観しよう。

諸要素の間の「つながり」を表現し、要素の単なる集合体とシステムとの相違を問題にする上で必ず取り上げなければならない観点として、ルーマンは《関係性》（Relation）あるいは《関係づけ》（Relationierung）という概念を用意している。そして彼の主張にしたがえば、要素の単なる集合体とシステムとを区別するメルク

マールは、この関係性の「選択」に存するといえるだろう。あるシステムにおいて関係づけられるべき要素の数が増大するとき、数学的に可能な関係性の数もまた急速に増大する。しかし、実在するシステムは、「要素間の様々な（複数の！）関係性」（S.44: 括弧内原文）ではあり得ない。それは可能な関係性の集合のなかから自身のあり方を一意的に選択しなければならない。そして、こうした数量的表現を「質的表現」に還元することをルーマンは提唱する。つまり諸要素は、相互に関係可能であるため、その「質」を何らかの選択によって獲得しなければならないのである。このことをルーマンは、要素の「クォリフィケーション」とも呼んでいる（S.41f）。

一方、こうした要素と関係性の問題は、時系列的な形式でもって再定式化される必要がある。というのも、社会的システムは、多数の所与の要素を同時に関係づけることによって形成されるわけではないからだ。コミュニケーションにせよ行為にせよ、社会的システム理論において要素とみなされるものは、ある瞬間において生起すると同時に消滅する「出来事（Ereignis）」としての特性を与えられている。このような時間化された（temporalisierte）要素から成るシステムは、時間軸上に展開する「プロセス」という形態で現れる。そうしたシステムの存続は、さらなる出来事　要素の「接続（Anschluß）」ないし「連結（Verknüpfung）」、あるいは「再生産（Reproduktion）」によってのみ可能である。それゆえ関係づけの問題は、そうした再生産の瞬間における要素のクォリフィケーションの問題へと置換される。より平易にいいかえれば、新たな要素の接続に際して、他の要素との関係性への配慮から、当の要素のあり方を規定することが求められるということである。

ここで我々は、ひとつの疑問を禁じ得ない。何らかの選択が必要であることは認められるとしても、いったい「誰」によって、またいかにしてそれはなされるのか。否、一般的な発想からすれば、それを行う「主体」は、コミュニケーションの場合であれ行為の場合であれ、それらに関与する人間ないし人間意識であるということになるだろう。しかし、ルーマンはそうした考え方を否定する。それに対して彼が導入するのが、《自己言及》のパラダイムである。そして、なかでも要素と関係性をめぐる問題への直接的な解答となっているのが、先にふれた基礎的自己言及の概念なのである。

基礎的自己言及という事態についてルーマンは、「プロセスが、当のプロセスの他の要素との連関に含み入れられることによって自己を指し示すような要素（出来事）から成り立たなければならないこと」（S.199: 括弧内原文）という定義を与えている。これについて若干の考察を加えておこう。

ルーマンは、スペンサー・ブラウンの論理学を援用しつつ、《言及》（Referenz）とは「区別（Unterscheidung）と指示（Bezeichnung）というエレメントから成るオペレーション」（S.596）であると述べている。この「オペレーション」という概念の意味するところは現時点では何ら明らかではないが、それについては後にふれるとして、ここではひとまず、オペレーションとは何らかの「作用」であると解釈しておこう。つまり言及とは、他との区別におい

て何ものかを指示しているような作用である。

一方、「自己言及もまた、厳密な意味において言及である」と彼はいう（S.600）。ここでは正確を期すため、少々難渋ではあるがルーマンによる自己言及概念への説明をそのまま引用しておこう。

「この概念領域の特殊性は、言及のオペレーションが、それによって指示されるもののなかに閉鎖されているという点に存する。それは、それ自身が属する何ものかを指示する。注意：トートロジーが問題なのではない。言及のオペレーションは、何らかの自己なるものをオペレーションとして指示するのではない。それは常にひとつの区別によって導かれつつ、それが自己と同一視する何ものかを指示するのである。」（S.600）

では、基礎的自己言及において基底に存する区別は何か。ルーマンによれば、それは「要素と関係性との区別」である。そして、ここで「自己（Selbst）」とみなされているのは当の要素に他ならない。以上のことから先の基礎的自己言及の定義を解釈し直すならば、次のようにいえるだろう。すなわち、要素とはひとつの言及のオペレーション＝作用であり、それは「他の要素との連関」＝関係性との区別において、自身を「要素として」指示している回帰的な言及作用なのである。

それを前提とするとき我々は、要素とその関係性とは同時発生的であると考えなければならない。要素はモザイクのように付け加えられるのではなく、はじめから関係性のなかで創発する。いいかえれば、ある要素の単位性は、その要素が含まれるシステム（プロセス）のみにとっての単位性なのである（S.42）。

しかし、この要素そのものが自己言及を行っているという帰結はにわかに理解しがたいものである。さらにこの主張は、要素そのものが関係性への配慮から自分自身をクォリフィケートしているということを意味している。果たして、そのようなことが本当に可能なのだろうか。

こうした事態を描写可能にするのが、ルーマンの《意味》概念である。なかでも、意味的な「指示（Verweisung）」をめぐるルーマンの概念規定は、基礎的自己言及との関連においてきわめて重要である。ルーマンによれば、意味という現象は、異なる体験や行為の可能性への「指示の過剰」という形式において現れる（S.93）。たしかに、ある瞬間において何ものかを把握するということは、他の何かを把握するのではないという点においてひとつの選択である。しかし、それは他の可能性の完全な「排除」ということではない。「指示は現実性の立脚点として自ら顕在化する（aktualisieren）が、それは現実的なものだけではなく、可能なものや否定的なものを含み入れている」（ebd.）。こうした、あらゆる意味的な指示に付帯する他の可能性への暗示ないし間接的指示を、ルーマンは「地平」のメタファー、あるいは「冗長性（Redundanz）」（S.94）の概念によっても表現している。

さらにルーマンは、意味的な指示のこうした地平保有性ないし冗長性を、「指示構造（Verweisungsstruktur）」（S.94）という概念によって再定式化する。この概念について我々は、多数の意味の間に

錯綜するネット化の形式をイメージすることができるだろう。こうした指示構造を通じて、各々の意味は非任意な特定の関係性でもって他の意味を指示している、というわけである。

かくてルーマンは次のように述べる。「各々の意味志向（Sinnintention）は…その指示構造において、さらなる体験と行為の多くの可能性の下でのひとつの可能性として自分自身を受け入れているかぎりにおいて自己言及的である。意味は、そのつど異なる意味への指示によってのみ顕在的なリアリティを獲得するのであり、ゆえに一時点における自足性はない」（S.95）。ここで指摘されている事態が、先にふれた基礎的自己言及そのものであることに我々は注目しよう。すなわち、ある瞬間において顕在的な意味が、他の意味への指示にともなって自身を「指示し返す（zurückverweisen／逆指示）」ことによってのみ意味をもつという、意味的な指示の回帰的な作用様式をルーマンは指摘しているのである。つまり、意味は意味だけをその支えとし、他の意味との関係性によってのみ自らを可能としている。そして、こうした各々の指示作用を、ルーマンは「意味要素（Sinnelement）」（S.98）とも表現するのである。

ところで、ルーマン理論において、心的システムとともに社会的システムに「意味システム」としての位置づけが与えられていること、そして両のシステム類型が、意識とコミュニケーションという基礎的プロセスの区別に基づいていることは周知の事実であろう。もちろん、社会的システム理論にとって、意識ではなくコミュニケーションの分析が決定的に重要であることはいうまでもない。次節では、ルーマンのコミュニケーション概念において、要素の基礎的自己言及がいかに理論化されているかを見てみよう。

二、コミュニケーションの基礎的自己言及（一）

我々はまず、コミュニケーションプロセスにおける「要素」が何であるかを明らかにしなければならない。ルーマンによれば、コミュニケーションとは「情報（Information）／伝達（Mitteilung）／理解（Verstehen）という三つの選択の総合（Synthese）」である（S.203）。彼は、この「総合」という表現に強調を置いている（S.196）。つまりルーマンは、コミュニケーションの単位性の完結――ひとつの「要素的（elementare）コミュニケーション」ないし「単位コミュニケーション（Einzelkommunikation）」の成立を、三つの選択の「コーディネーション」または「カップリング」によって定義しているのである。

そこで、以下に各々の段階を細分化して分析してみよう。コミュニケーションを可能にするためには、少なくとも二つの「情報処理プロセッサ」あるいは「インフラストラクチュア」が必要であるとルーマンは述べている（S.191）。いうまでもなく、これらは伝達／理解という両の選択に係わる心的システム、いわば「伝達者」と「受容者」を指している。ルーマンによれば、彼らもまたすでに一種の自己言及的システムであり、閉鎖的な意識プロセスという基礎の上で意味を操作する能力をもつとされる。[2]

次に我々は、ルーマンによる情報概念の位置づけに注意しよう。彼は情報理論における負エントロピーとしての情報定義を援用しつつ、他ならぬ情報それ自体がもつ固有の選択性こそが、コミュニケーションを生起させるモメントであると述べている（S.195）。伝達されるもの＝情報は、「単に選択されるだけではなく、それ自体すでに選択であり、それゆえ伝達される」（S.194）のである。

かくて情報の選択性によって伝達者の選択的注意が活性化され、伝達が生じる。この作用において情報と伝達は、「コード化」という形式において操作的に統合される。コード化の操作は、このとき用いられる二次的形式（例えば身体的動作や言語）が何であれ、「利用と排除」という原理に基づいている。つまり、世界内の無数の出来事の総体のなかで、コード化された出来事は情報として利用される――すなわち「コミュニケーション的出来事」として分出（Ausdifferenzierung）し、一方でコード化されない出来事はノイズとして排除されるのである（S.197）。こうした単なる情報的（非コミュニケーション的）出来事の知覚とコミュニケーションとの区別は、後にふれるようにきわめて重要なモメントであるが、その際のメルクマールとなるのが、情報と伝達との差異である。この差異が観察されるとき、我々はその出来事をコミュニケーションとみなすのである（S.198）。

さて、伝達それ自体は、さらなる「選択の提起」ないし「刺激」にすぎない（S.194）。そして情報／伝達の差異が、受容者の選択的注意をともなって観察されるとき、理解は生起する。理解でもってコミュニケーションの単位性は完結し、ひとつの要素的コミュニケーションが成立するのである（S.196）。ところでこの単位は、どのような働きをもつ単位なのだろうか。

ルーマンにしたがえば、要素的コミュニケーションは、前節で述べたような意味的な指示作用の一種に他ならない。「コミュニケーションは、自分自身がはじめて構成するそのつどの顕在的な指示地平から何ものかを把握し、その他のものを等閑視する」。そして、この「何ものか」とは情報に他ならない。「コミュニケーションにおいて顕在化される選択は…それが選び出すものを、すでに選択として、すなわち情報として構成する」（S.194）。いわば要素的コミュニケーションは、ある情報への指示を顕在化する、ひとまとまりの「意味要素」として作用する。コミュニケーションは「意味現象（Sinngeschehen）」（S.101）そのものなのである。

では、かかる要素的コミュニケーションにおいて、基礎的自己言及はどのようにして生じるのだろうか。いいかえれば、各々の要素的コミュニケーションは、いかにして他との関係性を獲得し、ひいてはプロセスとなることができるのか。

これについてルーマンは、「理解」の重要性を指摘する。「理解がコミュニケーション成立のための不可避なモメントであること」は、「コミュニケーションが自己言及的プロセスとしてのみ可能であるということを帰結する」（S.198）と彼はいう。ここで示されているのは、あらゆるコミュニケーションは、理解への関心、あるいは理解と無理解（誤解）との差異を焦点として行われるということであ

る。この差異への関心が欠けているとき、およそコミュニケーションは生起しないし、少なくとも持続することはない。コミュニケーションの経過においては、「常に何らかの理解テストが並行しなければならず、それゆえ常に注意の一部が理解コントロールのために流用される」のであり、こうした理解テスト（confirmation）は、コミュニケーションの「本質的モメント」であるとルーマンは述べている（S.198f）。

その際、「接続コミュニケーションがどんなに意外なかたちで生じようと、それは先行するコミュニケーションへの理解に基づいていることを（伝達者が）示し、また（受容者が）観察するために利用される」（S.198: 括弧内引用者）とルーマンは主張する。このことは、伝達者の意識的情報処理にとって次のことを意味している。すなわち彼は、すでに理解している情報を参照することによって、自身の理解程度をパートナーが逆推論することを容易に（困難に）したり、自身の伝達の理解可能性を高め（低め）たりといったコントロールを行うことができる。また、先行コミュニケーションの理解を通じてパートナーの誤解が観察された場合には、必要に応じて先行コミュニケーションについての再帰的コミュニケーション――これをルーマンは、自己言及の第二の形式　「プロセス的自己言及（prozessuale Selbstreferenz）」ないし「再帰性（Reflexivität）」として定式化している[3]――などの修正措置をとることもできる。しかしいずれにせよ、次のことは確実である。つまり彼が理解コントロールに集中するほど、彼はいっそう強くコンテクストに依存しなければならないのである。このことは、彼のパートナーにとっても同様である。かくて、「各々の単位コミュニケーションは…さらなるコミュニケーションの接続連関の理解可能性と理解コントロールのなかで回帰的に確保されている」（S.199）とルーマンはいう。

ここで指摘されているのは、コミュニケーションは、（意識的な意味プロセスに現れる他の非コミュニケーション的な情報ではなく）コミュニケーションのみを指示し、またコミュニケーションのみと関係づけられているという事実である。いいかえれば、要素的コミュニケーションの指示構造は、コミュニケーションのみを相互に連結しているのであって、そのネットを非コミュニケーションへと延長することはないのである。ちなみに両者の区別は、先に述べたように情報と伝達との差異を利用することによって可能となる。

ルーマンは次のように述べている。「（意識とコミュニケーションとの）選別は、単独の出来事については不可能である。というのも、単独の出来事において意識とコミュニケーションは相互に排除し合わず、おそらくは多かれ少なかれ重なっているからだ。それらの選別は意味的な自己言及の活動に存する。すなわち、顕在的な意味が、他のいずれの意味に自身を関係づけるかということに存するのである」（S.142: 括弧内引用者）。理解というモメントに集中するかぎり、あるコミュニケーション的出来事の意味は、他のコミュニケーションとの関係性への配慮において獲得される他はない。さもなくば相互理解は不可能である。かくて、「こうした再生産の形式（の相違）が心的構造と社会的構造とを分化させ」（S.141: 括弧内引用者）、要素

的コミュニケーションは、その指示構造（社会的構造としての）に導かれることによって回帰的自己指示を遂行する。コミュニケーションの基礎的自己言及という事態を、我々はひとまず以上のように描写することができるだろう。

それは同時に、多数の要素的コミュニケーションの相互依存からのみ、コミュニケーションプロセスは成り立っているということを意味している。このことは直ちに、自己言及的な《閉鎖性》（Geschlossenheit）という特性を帰結しているのである（S.199f）。

三、コミュニケーションの基礎的自己言及（二）

ここでは、要素的コミュニケーションのクォリフィケーションの「メカニズム」について、さらに検討を加えてみたい。というのも、「指示構造を媒介した要素の回帰的自己指示」という発想は、確かに意味というもののジェネシスを語る上では適切かもしれないが、まさにその瞬間において、他ではなくその情報がいかに選び出されるのかということの説明としては不十分であると思われるからである。

その際に加えて考慮するべきは、コミュニケーションの閉鎖性と《開放性》（Offenheit）とのコンパティビリティの問題である。主題ないし意味内容としてであっても、自己言及的に閉鎖したコミュニケーションが環境内の事象を把握可能であるという発想は、一見矛盾しているようにも思われる。しかし、日々我々が世界についてコミュニケーションを行っていることは否定できない事実である。「自己言及的閉鎖性がいかに開放性を創出し得るのか」（S.25）とルーマンが問うとき、意図されているのはこうした事情であると思われる。

実のところ、コミュニケーションは常に環境からの「刺激（Anstoß）」（S.69）にさらされているといってよい。意識における様々な揺動は直ちにコミュニケーションに反映されるし、また物理-化学的リアリティにおける揺動も、人間の知覚を媒介して何らかの影響を及ぼすだろう。しかし、それが意味の相互依存の内部でいかなる「意味をもつ」かということは、また別問題である。このように考えるとき、ここまで一貫して問われてきた要素のクォリフィケーションの問題は、そうした外部からの影響にいかに意味を付与するか、つまりいかにしてコミュニケーションの内部に「持ち込む」かという問題と結びつくことになる。

この問題の解決にあたって、ルーマンは《構造》概念にきわめて重要な役割を与えている。それゆえ、我々はこの概念をより詳細に把握する必要がある。ルーマンは、コミュニケーションの指示構造、すなわち要素的コミュニケーションを相互に連結する構造を、「世界構造（Weltstruktur）」とも呼んでいる。[4] しかし現実問題として、意味的なコミュニケーションにとって、構造に相当するものは何だろうか。それは本当に「存在」するのだろうか？ ルーマンは、意味理論のコンテクストをふまえるとき、構造概念は《期待》（Erwartung）概念と結びつけられなければならないと主張する。すな

わち「社会的構造は期待構造に他ならず」(S.397)、「その他に構造形成の可能性はない」(S.398) のである。

期待構造の概念は、出来事＝要素概念に対する「相補的概念」であるとルーマンはいう (S.392f)。先にも述べたように、時間化されたシステムの要素は、生起すると同時に消え去る出来事である。それは瞬間における顕在性としてしかあり得ない。一方、期待構造は「現在的未来と現在的過去とを統合するような現在の時間地平において時間を通して把握する」(S.399) とされる。いわば期待は、要素と要素、出来事と出来事の間の「空白」を架橋する。それゆえ、そのつど使用されている期待構造の布置は、「システム状態」(S.102) に相当するといえる。というのも、要素＝出来事は、いかなる意味においても「状態」とはいえないからだ。

コミュニケーションの指示構造は、その現実態においては期待構造として現れる。「期待概念は、意味対象や意味主題の指示構造がより濃密化された形式においてのみ使用され得ることを示している」(S.140) とルーマンは述べる。各々の要素的コミュニケーションを結びつけているのは、こうした「期待ネット (Erwartungsnetz)」(ebd.) なのであり、この定式化によって、意味理論のコンテクストにおける指示地平―冗長性―構造―期待といった一連の概念が関連づけられることになる。

では、かかる期待構造の機能は何か。ルーマンによれば、それは「差異」の経験を可能にすることにある (S.69)。期待は、未来の出来事への構えを、期待の成就／幻滅というバイナリー形式において開放的に保持し――このことは、とりわけ言語的コード化に起因するあらゆる言明の二重化 (反対意味の不可分さ) によって保証されるのだが――来るべき出来事をそれらのいずれかとして把握することを可能にする。ただし、成就／幻滅という差異は、必ずしも一方への選好に結びついているわけではない。重要なのは、当の出来事にともなう「意外性 (Überraschung)」(S.390) である。結果がいずれであるにせよ、それは二者択一的な未規定性・開放性に対し、ひとつの規定・可能性排除をもたらすことになる。それは「1ビットの情報」(S.68) として現れるのだ。

ここで「情報」というタームが登場したことは、単なる偶然ではない。この概念は、情報／伝達／理解というコミュニケーション的総合を構成するひとつの選択として扱われてきた情報概念と全く同一のものである。つまり、要素的コミュニケーションのクォリフィケーションとは、期待構造の選択性に導かれつつ、ひとつの情報が顕在化することに他ならないのである。とはいえ、構造の機能は未来の出来事への「予見」ではないし、ましてや「決定」などではない。それはあくまで「可能性を境界づけ、先行ソーティングを行う」(S.102) だけである。その意味で、構造は「可能性遊域の制限」(S.397) として作用するのだ。

一方、情報そのものがもつ選択性は、いかなる作用をもたらすのだろうか。ルーマンによる情報の定義は、「システム状態を選択する出来事」(S.102) というものである。コミュニケーション的出来事は直ちに消失するが、情報は失われない。それはシステム状態の

何らかの変化、すなわち「構造エフェクト」をすでに引き起こしている。いうなれば、システムは構造でもって構造に反応する、というわけである。このようにして、構造はストックのなかから必要に応じて選び出されるのであるが、このことをルーマンは、「ストアし（speichern）」「コールする（abrufen）」（S.69）という比喩によっても表現している。[5] かくて要素＝出来事の消失とともに期待可能性もまた再創出され、さらなる要素的コミュニケーションの接続が促されることになる。[6]

ところで、情報概念の以上のような把握は、コミュニケーションの自己言及的閉鎖性と世界開放性との両義性を体現しているといえる。情報は、構造によって可能となり、かつ意味的に把握されるという点において、確かにシステム内的なものである。コミュニケーションの外部に、何かそれ自体として情報なるものが存在するわけではない。にもかかわらず、その選択性は環境に帰属される。「情報はシステム自身が投企し、レリヴァントに維持する可能性領域からの選択として現れるのだが、それはシステムではなく環境の遂行する選択として現れる――すなわち体験される（erlebt）のである」（S.104）。

こうした環境への意味の割り当て（Zuordnung）を、ルーマンは自己言及的システムの「脱パラドクス化」の戦略と見る。「環境との関連は、内的に相互依存中断要因（Interdependenzunterbrecher）として組み込まれる」（S.65）と彼はいう。しかし、それは決して環境からの刺激が意味に直結しているということではない。構造の助けでもって、「システムは…外的な事象との直面において何が生じるかということを、内的な原因のみによって確定することなく、環境の因果圧力に対して距離を保つことを可能にする」（S.69）。ここで指摘されているのは、伝達／理解可能性の内的な制約性であるといってよい。いかなるコミュニケーション的出来事が生起しようと、それがどのような「意味をもつ」か（つまり情報として何が顕在化し得るか）は、構造を媒介して他の要素的コミュニケーションとの関係性に拘束されているのである。こうしてコミュニケーションは、あくまで自己言及的に閉鎖しつつ、にもかかわらず決定を環境に委ねる――すなわち開放することを可能にする。いいかえれば、閉鎖的コミュニケーションは体験を通じて環境の複雑性を把握するのである。[7]

さて、コミュニケーションの基礎的自己言及についての考察を締めくくるにあたって、我々はルーマンの《生産》（Produktion）概念の定義に注目しておこう。彼によれば、生産とは「ある作用を働かせるのに必要な原因のうちの全てではなく若干が、システムによるコントロールの下に置かれること」（S.40: 強調原文）であるとされる。ゆえに、環境からの刺激を情報として意味ネットの内部へと持ち込むかぎりにおいて、要素的コミュニケーションの接続は、再「生産」であるといえる。それは決して単なる「反復」ではなく、変化を強制されている。こうした「システムの変化のない維持ではなく、システムの維持と変化を両立するような要素のレベルにおける前進」（S.79）を、ルーマンは《オペレーション》と呼ぶ。

誤解してはならないのは、メタレベルにある何らかの一貫した作用によって、要素的コミュニケーションが次々と生産されるのではないということだ。すでに確認したように、個々の要素そのものが自己言及的なオペレーションに他ならないということが、基礎的自己言及という概念の含意である。基礎的自己言及のオペレーション＝要素は、いわば自ら-生産する（auto-poiesis）。かくて、コミュニケーションプロセスの自己推進、顕在性と可能性との絶えざるフォーメーションの更新としての意味の自己運動は、「至高のオートポイエシス」（S.101）であるとルーマンは主張するのである。

四、行為の基礎的自己言及と社会的システム

さて、以上の考察でもって、コミュニケーションの基礎的自己言及という事態の概要は明らかになったと思われる。次いで我々は、行為のケースにおける基礎的自己言及を検討するとともに、冒頭でふれた「二重の解答」、つまりコミュニケーション概念とは別に行為概念を社会的システムの要素として導入することの必然性を考察してゆくことになる。

そこには行為概念の導入を要求するような「問題」が存在しなければならないが、ルーマン理論においてそれに相当するのが、《ダブルコンティンジェンシー》の問題に他ならない。ルーマンがこの概念をパーソンズの行為システム理論から継承していることは周知の事実であるが、それを彼は「意味の構成と絶えざるプロセシングを扱う、より一般的な理論水準へと拡張し」（S.151）ようとする。この概念によって示されているのは、自我と他我、すなわち意味的な情報処理能力をもつ複数の自己言及的システム（根底においては心理的システム）が、「相互に見通せず見積もり不可能」――これをルーマンは「視座の分散（Divergenz）」と呼び、また「二つのブラックボックス」という比喩によっても表現しているが――であるにもかかわらず、自身の行動（Verhalten）の意味的な規定を、他方の行動規定を前提として遂行しようとするような状況である（S.156）。こうした事態をルーマンは、「自己指示と他者指示の並行（Gleichlauf）」あるいは「並行的（mitlaufende）自己言及」とも表現している（S.607）。

ごく短絡的にとらえるならば、ダブルコンティンジェンシーによって生じるものは、あらゆる行動の円環的な決定不可能性である他はないようにも思われる。しかしルーマンは、「ダブルコンティンジェンシーの問題は、行為の可能性の条件に属する」のであり、「行為システムの要素、すなわち行為は、このシステムの内部でのみ、またダブルコンティンジェンシーの問題の解決によってのみ構成され得る」と主張する（S.149）。我々はこの解決のステップを追ってみなければならない。

ルーマンによれば、ダブルコンティンジェンシーとは単なる決定不可能性以上のものである。なぜなら、それは確かに未規定性をもたらすのだが、そうした未規定性は何らかの差異とともに生じるのであり、そして差異は必ず何らかの「同一性（Identität）」に基づ

いているからである。例えば、あるコンセンサスの形成が問題となるとき、参与者はともに、コンセンサス／ディッセンスという差異を問題化するような視座に立たなければならない。両者が同一の視座を共有するからこそ、両者の視座の相違もまた目に見えるものとなるのである。つまりダブルコンティンジェンシーは、「自我が他我を…《視座の非同一性》でもって、しかし同時に《この経験の両者における同一性》でもって経験する」ことによって、「視座の収斂（konvergieren）」を可能にする（S.172）。それはひとつの「メタ視座」（超視座、諸視座についての視座）の創発、そして新たな水準におけるリアリティの創発に他ならない。

もちろん、この「収斂」は直ちに否定可能である。その意味で、同一性はその「否定態（Negativität）」との差異を常にともなっている。いわば自己指示と他者指示の差異は、「同一性と差異との差異[8]」へと転換されるのだ。その否定可能性を完全に消し去ることは決してできない。ただ確かなのは、収斂の否定は、収斂によって可能となることの放棄を意味しているということである。先の例に関していえば、コンセンサス／ディッセンスという区別への収斂を放棄しないこと、すなわち「この否定態の否定」（S.172）を行うかぎりにおいて、両者はこれを主題化することができるのである。この問題については、システムの「再生産」との関連において後に再びふれることにしよう。

さて、この「視座の収斂」に依拠して行動規定を遂行することにこそ、行動の円環的決定不可能性から脱出するチャンスは存する。つまり自我と他我は、ダブルコンティンジェンシー的に収斂した視座に立ち、そこから彼らの行動を規定するのである。そしてこのとき、彼らの行動は《行為》となる。「ダブルコンティンジェンシーの問題は、参与システムのあらゆる行動に、それがいかに有機的・物理的に条件づけられていようと、ある付加的性質を与える――すなわち行動は、ダブルコンティンジェンシーに派生する未規定性を縮減するのである。こうした局面の下で、行動は自身を行為としてクオリフィケートすることになる」（S.168）。

行為のクォリフィケーション＝意味規定は、決して単一の行為においては行われない。行動の決定不可能性は、多数の行為の相互依存的な決定可能性へと「飛躍」するのである。ここでルーマンは、前述の《基礎的自己言及》の概念を行為に対しても適用する。我々は、この概念が示している事態――他の要素への指示にともなう自身への逆指示による要素の自己指示――を今一度想起しよう。行為の意味は、常に他の行為との関係性を指示していなければならず、またそれゆえに規定可能なのである。「ここで問題とされ、指示し返される《自己》は、行為に他ならず」、「基礎的自己言及は行為をはじめて構成する意味規定プロセスに…いつもすでに組み込まれている」（S.182）とルーマンはいう。行為の構成と、それが要素として関係性のネットに組み込まれるような諸行為のシステム、すなわち《社会的システム》の創発とは不可分である。我々は社会的システムというものを、まず何よりも要素＝行為の基礎的自己言及として把握することができるだろう。

行為の意味規定は、「偶然（Zufall）」とそれらの「条件づけ（Konditionierung）」を利用する。「ダブルコンティンジェンシーという固有の問題への反応によって社会的システムが心理的・化学的・有機的リアリティから離陸し、固有の要素や境界を形成するやいなや、こうしたシステムに対して偶然の可能性が生起する」（S.170）とルーマンはいう。その背景には、ダブルコンティンジェンシーによる視座の収斂は「規定への関心」を想定し、「条件的レディネスの状態（state of conditional readiness）」を生み出すという主張がある（S.172）。このときシステムは、「任意の規定に対して高度に感受的」（S.184）であり、規定に利用可能なものは何であれ収斂の内へと吸収するような状態へと励起されているのである。かくて視座の収斂は、「偶然を組み込み、それによって成長し」（S.184）、構造形成へと至る。つまりダブルコンティンジェンシーの経験は、「システムにおける条件づけ機能のために偶然を構成・開拓」し、「偶然を構造構築の蓋然性へと転換」するのである（S.170）。まさにその意味で、それは「システム構築の加速要因」（S.184）、すなわち「触媒」（S.170）として作用する。

こうして視座の収斂は、行為の構成を可能にするような「縮減視座」ないし「秩序観点」（S.189）、すなわち社会的システムへと成長する。逆にいえば、各々の行為は、ひとつの視座＝社会的システムへの準拠（Referenz／言及）を顕在化するのである。一方、行為は瞬間的な「出来事」としての性質をもつ時間化された要素である（S.389）。それは生起するやいなや、直ちに消失する。もし再び行為が生じないならば、それは当のシステムの存立が「否定」されたということを意味する。社会的システムにとって、実在するということは、行為＝要素の絶えざる「再生産」――それは当のシステムへの準拠の否定態の否定を意味する――に他ならないのである（S.603）。

以下に我々は、このオペレーションの作動様式をもう少し明細化しておこう。第一に、行為の基礎的自己言及と意味規定が、コミュニケーションによって意味的にプロセシングされなければならないことはいうまでもない。「社会的システムにおいて…要素の分解のための手段として利用可能なのはコミュニケーションだけである」（S.226）。つまりコミュニケーションは、「システムがそれから成り立つような要素を生産する、社会的システムの基礎的プロセス」（S.192）である。

こうしたコミュニケーション的な行為の把握、あるいは行為の「主題化」において、行為と体験（環境からの情報）とは同一の意味空間へと共在させられ、相互に結びつけられることになる。もちろん、社会的システムにとって関係づけに寄与する単位はあくまで行為であり、その水準を下回ることはできない。とはいえ、「行為によって体験を排除することはできない」（S.124）のであり、行為の意味は、それにとってレリヴァントな体験との関連において規定されなければならない。こうした情報処理を、ルーマンは「帰属プロセス（Zurechnungsprozeß）」と呼ぶ。行為の帰属は、文化史的・状況特殊的に構造化されている何らかの「図式」や「ゼマンティク」――

例えば「動機」や「利害関心」といった――に基づいて行われる。[9] この帰属プロセスと「シンボル的一般化」を経て、行為の単位性ははじめて獲得され、その基礎的自己言及もまた可能となる。これについてルーマンは、パーソンズの《単位行為》の概念をふまえつつ、「行為は、一連の構成要因の単位性をシンボル的に一般化するような同一性付与によってのみ可能である」（S.135）と述べている。つまり行為とは、多数の体験との関連から「すでに複雑に構成され」（S.46）、同時に「一塊の意味」（S.138）へと縮減されたメタレベルの単位なのである。

行為と体験との結合は、先にふれた「偶然」の組み込みとも関連がある。第一に、体験は決してシステムのコントロールの下には置かれないがゆえに偶然的であり、逆にだからこそ「行為の再生産のために十分な無秩序を利用可能にする」（S.170）。つまり体験は、行為の再生産の「環境原因」（S.40）となり得るのであり、またこうした「外的共規定（externe Mitbestimmung）」（S.393）を受け入れているかぎりにおいて、行為の構成は再「生産」である――ここでは、「原因の総体を《支配》することの放棄」（S.40）という生産概念の含意を想起しよう――といえる。第二に、行為の意味規定における偶然の組み込みと構造形成は、システムの体験領域の選択を意味している。システムの環境接触や境界作用の特殊化は、その結果に他ならない。[10]

もうひとつ、コミュニケーションと行為との関連において見逃せないのは、両者の「重なり」ともいうべき事態、すなわち「コミュニケーション的行為」（S.268）あるいは「伝達行為」の問題である。社会的システムのオペレーションがコミュニケーションプロセスを媒体としていることは先に確認した通りであるが、さらにルーマンは、「コミュニケーションのシステムは…伝達そのものを行為として把握しなければならない」（S.227）と述べている。つまりここで言及されているのは、社会的システムの存立に寄与するコミュニケーション経過そのものを、コミュニケーションにおいて主題化することの必要性であり、その際、コミュニケーションは行為という形式に変換されるという主張なのである。その理由について、ルーマンはかなり煩雑な議論を行っているが、端的にいうならば、コミュニケーションがその「対称性」と「可逆性」のゆえに「現実態においてきわめて複雑」（S.232）かつ「直接的には観察不可能」（S.226）であるのを、行為としての理解にともなう「非対称化」と「時点化（Punktualisierung）」の助けでもって単純化し、オペレーションの接続可能性についての「認識可能な輪郭を獲得する」（S.233）というのがその要旨である。

もちろん、主題化される全ての行為が伝達としての性格を帯びているわけではないし（非コミュニケーション的な「単独行為」の存在）、また全てのコミュニケーション的現象が行為として把握されるわけではない（例えば相互作用システムの場合には、ほぼ全ての発話が行為として操作されなければならないのに対し、社会の下位システムではそうでもない、といった具合に）。しかし、いずれにせよ確かなのは、コミュニケーションを行為へと「縮減」すること

によって、社会的システムは自らのコントロール、いわば「自己操縦（Selbststeuerung）」の能力を獲得し、ひいては「コミュニケーションの方向づけられた前進を自ら可能にする」（S.239）ということである。「その意味において行為は、システムの瞬間瞬間における自己再生産の不可欠なコンポーネントとなる」（S.227）。

さて、以上の考察でもって、社会的システムの要素をめぐる「二重の解答」の含意はすでに明らかにされたとしてよいだろう。ルーマンは次のように述べる。「特殊なリアリティとしての社会的なるものを構成する原基的（elementar／要素的）なプロセスは、コミュニケーションプロセスである。しかしこのプロセスは、自身の操縦を可能にするべく、行為へと縮減ないし分解されるのだ」（S.193）。社会的システムはコミュニケーションのオペレーションが作動するかぎりにおいて存立するのであり、その意味において、それは各々の要素的コミュニケーションから「成り立っている」といえる。しかし社会的システムにとって、関係づけのためにそれ以上分解不可能な最小単位は、あくまで行為という縮減形式である。それゆえ行為は、社会的システムの狭義の要素とみなされてよい。

さらにルーマンは、「両者は、固有の複雑性の縮減として把握されるべき関係を形成している」（S.193）とも述べている。彼はこの「複雑性の縮減」というタームについて、「複雑な連関をもつ関係性構成体（Relationsgefüge）が、二次的な連関によって、より少ない関係性でもって再構築される場合」（S.49）という定義を与えている。我々は、ここでいう一次的連関に相当するものがコミュニケーションの基礎的自己言及であり、二次的連関に相当するものが行為のそれであると考えることができるだろう。そしてルーマンは、複雑性概念を「選択強制」として把握することによって、こうした縮減を必然的なものとみなす（S.47）。いいかえれば、社会的システムの「最小ケース（Minimalfall）」はコミュニケーションの基礎的自己言及であるが、それは十分な関係性制限を欠いた「要素の様々な関係性の単なる集合」にすぎず、「システム」としては不完全なものである（S.45）。だが、それはいつもすでに、行為の基礎的自己言及によって「社会的システム」へと条件づけられ縮減され、関係性を制限されたかたちで現れるのである。[11]

同時にこの縮減は、システムと環境との「複雑性落差」、あるいは環境に対する「複雑性の劣勢（Unterlegenheit）」に対応している。というのも、コミュニケーションはもっぱら体験において環境からの情報流入にさらされているからだ。現在のルーマン理論にとって、環境は常にシステム自身よりもはるかに複雑であり、システムは環境複雑性に対応した「必須多様度」を全く欠いているということは普遍的な仮説であるが、このことは、複雑性落差の安定化ないし「複雑性劣勢の補償（Kompensation）」という新たなレベルの選択戦略を要求する。[12]

さらに、縮減は単なる秩序化作用ではなく、情報ポテンシャルと把握可能な複雑性を上昇させる効果をもつとルーマンは主張する（S.236）。ルーマンは、コミュニケーションを「システムの自己励起と意味氾濫」（S.236）としてとらえ、「コミュニケーションの最

も重要な作用は、偶然や干渉（Störung）、あらゆる種類の《ノイズ》に対するシステムの感受化にある」（S.237）と述べている。社会的システムの形成は、より多くのコミュニケーションを走らせ、より多くの差異を可視化し、自身をさらなる情報獲得へと駆り立てるのだ。かくてシステムと環境との関係は、一種の相互亢進とみなされる。「複雑性落差に定数はない」（S.48）のである。またこのことは、境界作用の特殊化との連携によって、「環境への依存性と非依存性の同時的上昇」（S.250）を可能にするのである。

結語、基礎的自己言及から《反省》へ

ここでは最後に自己言及の第三の形式についてふれておこう。

行為の基礎的自己言及は、その行為が関係づけられる行為連関と、関係づけに寄与しない他の行為連関や、行為ではない全ての環境要因との区別ができるとき、はじめて可能となる。つまりそれは、当の行為を要素とする社会的システムと、他の社会的システムを含む環境との分離を前提としている。それゆえ行為の主題化は、システムを環境から区別するようなオペレーションの遂行であるといえる。[13]

こうしたオペレーションを、ルーマンは《反省》（Reflexion）と呼ぶ（S.601）。反省における主導差異は、「システムと環境との区別」である。いいかえると、このオペレーションは、環境との区別において自己を「システム」として指示する。その意味で、反省もまた自己言及の一形式であることは間違いない。ただし、自己言及と「システム言及（準拠）」とが一致するのは、この形式に限られているのである。

ルーマンは、社会的システムの反省を、《自己観察》（Selbstbeobachtung）と《自己描写》（Selbstbeschreibung）という概念によって明細化している。彼によれば、「区別が指示されるものについての情報の獲得に活用されるとき、言及は観察となる」（S.597）とされる。つまり、それが自身の再生産に関する諸々の情報をもたらすかぎりにおいて、「社会的システムにおける個々の行為の絶えざる創出は、並行的な自己観察の遂行」（S.229）であるといえる。また、「自己観察が何らかのゼマンティク的産物を生産するとき、それは自己描写となる」（S.618）という定義にしたがい、社会的システムが自身を「システム／環境差異」――いわば諸行為の連鎖と様々な環境要因との対比――として表象することを、彼は自己描写と呼ぶのである（SS.235f）。

そして以上のことをふまえ、社会的システムの要素をめぐる「二重の解答」を、ルーマンは次のようにも再定式化している。すなわち、コミュニケーションと行為との区別は、社会的システムの「構成」と「観察」という水準の差異に対応しているというのだ。それによれば、「コミュニケーションは自己構成の要素的単位であり、行為は自己観察と自己記述の要素的単位である」（S.241）。両者は不可分かつ不可欠であり、それらの共働によって、そして異なる三つの形式の自己言及の共働によって、社会的システムのオートポイエシスは可能となるのである。

注

(1) この問題提起とその展開については、*Soziale Systeme*, Suhrkamp, 1984, S.191-241 (Kap.4) を参照。本稿における考察は、ルーマンの主著と目される本書に一貫して依拠することによって行われる。以後、特に必要のないかぎり、本書への参照は頁数だけを示すことにする。

(2) 心的システムの自己言及については、S.354-367 を参照。

(3) S.199, 601, さらに S.610-616 を参照。

(4) ルーマンは、世界構造と社会的システムの行為（要素）を整序する構造とを区別するとともに、むしろ後者に記述上の重点を置いているが、我々がこの節で取り上げているのは前者である。しかし、要素の再生産と構造との関連という問題図式は両のケースに共通であり、また後者の構造概念が世界構造にも適用可能であることをルーマン自身も認めているため、本稿では必要に応じて横断的な記述を行っている。S.382 を参照。

(5) その意味で、構造はシステムの「固有の過去」(SS:69) ないし「意味の歴史」(S.105) を反映している。それは「進化上の成果」であると同時に、常に変化にさらされている。

(6) こうしたサイクルを、ルーマンは「分解（Auflösung）と要素の再生産との相互依存」とも呼んでいる。S.78 を参照。

(7) 厳密にいえば、体験にはコミュニケーションや行為についての体験（いわばシステムの自己複雑性の把握）も含まれているから、「コミュニケーションは体験を通じて世界（システム＋環境）の複雑性を把握するのであり、その大部分は環境の複雑性である」という方が正確かもしれない。

(8) これをルーマンは、自己言及的システム理論の「主導差異（Leitdifferenz）」とみなす。S.26f を参照。

(9) 見かけ上、行為の原因は様々な要因（諸々のシステム、とりわけ個人　行為者）に求められるが、それは何ら十分な因果的説明を提供するものではない。社会的システム理論において重要なのは、体験の選択性が環境に帰属されるのに対し、行為の選択性がそれを要素とする社会的システムに帰属されるという点である。S.228ff, さらに S.124 を参照。

(10) 環境を行為のコンテクストとして表象することに基づくシステム／環境関係の特殊化については、S.269-285 (Kap.5) に詳しい。

(11) 「条件づけ」と複雑性（の縮減）との関連については、S.44-7 を参照。また彼は、社会的システムの形成は「コミュニケーションの条件づけ」であるとも述べている。S.236 を参照。

(12) S.47f, さらに S.249-252 を参照。

(13) 社会的システムは、自身の要素行為について固有の「類型メルクマール」ないし「類型論（Typik）」を用いることによってその統一性を獲得し、ひいては自身を他の社会的システムから区別する。つまり再生産は決して反復ではないが、「要素の《類似性》という最小限の基準を要求する」(S.607) のである。一方、あらゆるコミュニケーションから成り立つ包括的な社会的システムである社会の場合、その統一性表現のために「行為」というメタレベルの単位を用いる必要はない。社会は端的にコミュニケーションを要素とし、コミュニケーションと非コミュニケーション的環境という区別＝境界によって自ずと分出するのである。この問題については、S.557, さらに N. Luhmann, *Die Wirtschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp, 1988, S.50ff などを参照せよ。